



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

## 人種差別を考える授業： 小学校高学年での教育支援事例から

メタデータ	<p>言語: Japanese</p> <p>出版者: 東京学芸大学教育実践研究推進本部</p> <p>公開日: 2024-02-07</p> <p>キーワード (Ja): 人種差別, 感情移入 (シンパシー／エンパシー), 視点の逆転, 体験型学習, 多文化共生教育, 教育支援, ETYP:教育実践</p> <p>キーワード (En): racism, sympathy/empathy, perspective reversal, experience-based learning, multicultural education, educational support</p> <p>作成者: 出口, 雅敏</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属: 東京学芸大学</p>
URL	<p><a href="http://hdl.handle.net/2309/0002000197">http://hdl.handle.net/2309/0002000197</a></p>

# 人種差別を考える授業

—— 小学校高学年での教育支援事例から ——

出口 雅 敏\*

地域研究分野

(2023年8月30日受理)

## 要 旨

本稿は、小学生高学年を対象として、人種差別をテーマとする体験型の教育実践の方法を探ることを目的としている。また、多文化共生教育支援の一環として本研究を位置づけている。それゆえ、人種差別をテーマとする授業指導案を実際に創案し、授業者と授業実践を協働しながらその可能性と課題を明らかにし、多文化共生教育の進展に寄与したい。

本稿では、人種差別をテーマとする体験型学習の先駆例として、J.エリオットの実験授業「青い目／茶色い目」を取り上げ、批判的に検討する。エリオットの実験授業において、「感情移入」や「視点の逆転（役割交換）」を取り入れた点は評価される。しかし、感情移入の深さや差別のリアリティを追求するのではなく、「知的作業をともなう感情移入（エンパシー）」の育成を目指す授業指導案を本稿では提案する。

キーワード：人種差別、感情移入（シンパシー／エンパシー）、視点の逆転、体験型学習、多文化共生教育、教育支援

## 1. はじめに

本研究の目的は、人種差別をテーマとした体験型の教育実践の方法を探ることにある。今日、「人種」は、もはや客観的・科学的概念とはされていない。しかしながら、現実の社会生活において「人種差別」は、いまだ起き続けている社会現象、社会問題の一つといえよう。では、人種差別の問題を学校教育の中でどのように児童・生徒たちと考えていくことができるだろうか<sup>1)</sup>。この問いは、これからの多文化共生教育を進展させていくうえでも重要な課題である<sup>2)</sup>。

そこで本稿では、小学校において児童が、人種差別の問題理解を深める授業指導案について具体的に考察する。そのため、本稿ではまず、人種差別に関する体験型学習の先駆的モデルといえるJ.エリオットの実験授業を紹介し、批判的に検討していく。すなわち、エリオットの実験授業において、被差別者に対する「感情移入」、および「視点の逆転（役割交換）」という重要なアイデアが含まれていたことは評価する。しかしながら、人種差別をテーマとした体験型学習として、「感情移入の深さ」や「差別のリアリティ」を問う方向に展開するのではなく、「知的作業をともなう感情移入（エンパシー）」を目指す授業指導案の展開を、本稿では提案する。

以上の目的から、以下では、都内の小学生高学年を対象とした教育支援事例を報告する。そして、教育支援に関わる授業指導案の作成とその授業実践の参与観察、また、児童のワークシートへの回答、授業者や教育支

---

\* 東京学芸大学 人文科学講座 地域研究分野 (184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)

援者として参加した学生の感想や意見等を基に考察を行う。なお本教育支援は2021年10月から計画・準備が始められたが、Covid-19のため実際の教育支援時期は延期され、その実施は、2023年2月から3月にかけて行われた。

以下の行論では、はじめに、人種差別をテーマとした体験型学習の先駆例としてJ・エリオットの実験授業について紹介し、その意義を批判的に検討する(2章)。次に、前章の批判的検討を踏まえて創案した授業指導案の概要を説明する(3章)。続いて、各回の授業指導案を具体的に示し、実際の授業の様子を報告する(4章)。最後に、以上の教育支援事例の検討を通じて、その成果と今後の課題をまとめる(5・6章)。

## 2. J.エリオットの実験授業とその批判的検討

### 2. 1 J.エリオットの実験授業

ジェーン・エリオット (Jane Elliot, 1933-) は、アメリカ国内の人種差別を児童に体験的に理解させるために実験授業「青い目／茶色い目 (Blue eyes-Brown eyes)」を行った。彼女は白人プロテスタントの町アイオワ州ライズビルで、小学三年生を受け持つ教師であった。1968年、反人種差別の象徴的存在であったキング牧師 (Martin Luther King Jr., 1929-1968) が暗殺された翌日、エリオットは児童に対して次のような授業を行った。

はじめに、クラスの生徒を「青い目」と「茶色い目」の二つのグループに分けた。そして目の色の違いを理由に、一方のグループを差別的に扱った。授業は2日間にわたって行なわれ、1日目は青い目のグループを優遇し、茶色い目のグループを冷遇した。後者は前者に対する劣等性を指摘され、両者の優劣関係は授業中のみならず学校生活を通じて維持され、休憩時間の長さや遊具の利用等についても適用された。翌日の2日目は、両グループの立場が逆転される。すなわち、茶色い目のグループが優遇され、青い目のグループは冷遇された。最後に両グループの差別、優劣関係を取りのぞき、児童たちが各自の差別体験にともなう痛みや辛さを話し合い、「差別」を体験的に理解し共有することで、人種差別への反対意志をクラス全員で確認して終わった(ピーターズ 1988)。

以上の人種差別をテーマとしたエリオットの実験授業は、次の二つの点で重要なアイデアを提供している。第一に、人種差別を生徒が理解するために「体験」を重視した点である。生徒は自らが差別される被差別体験を通じて、被差別者への感情移入を達成し、人種差別の不公平さを「身をもって」学んだといえる。第二に、生徒は被差別体験のみならず、「差別する立場」にも立たされている点だ。これは「視点の逆転(役割交換)」といえる。生徒は自らが「差別される立場」のみならず、「差別する立場」の両者を体験することを通じて、主体的・構造的に「差別」を理解する契機が与えられたといえよう。

### 2. 2 実験授業の批判的検討

このようなエリオットの実験授業に関して、木下(2017)は、道徳教育の観点から検討している。木下は、エリオットの実験授業は「差別行為の否定的価値を実感できるように工夫された実践」であるとし、その「リアリティ」に着目している。そして、2日間にわたる学校生活の中で、具体的な差別行為や状況、それがもたらす事態までの連関全体を、具体的な状況に即しながら児童に理解させている点を木下は評価している。そのうえで、木下は、「その際、この実践の成否を左右するのは、教師によって生み出された差別状況が『リアル』なものかどうかである。たんなるゲームや見え透いた演技と見なされてしまえば、差別のもたらす否定的結果を生徒に深く実感させることはできない。そのためエリオットは断固とした態度で『差別者』を演じ、様々な工夫を通じて教室での差別にリアリティを与えようと努めている」(木下: 213)とした。

このように木下は、エリオットの実験授業の有効性を捉えるとともに、その有効性が、教師の態度と工夫によってリアリティを与えられた差別的状況、つまり、「差別のリアリティ」にあったことを指摘した。

だが、木下も指摘するように、そこには、エリオットの実験授業に対する批判、つまり、「差別のリアリティ」を追求すればするほど児童の心理的負担が大きくなるというジレンマや、児童による負の学習効果(=「差別者」への懐疑の発生や差別行為の助長等)といった問題もある。さらに、児童同様に、教室最大の「差別者」を演じる教師自身の心理的負担や、その教師に対する児童の不信感の誘発も看過できないだろう。

木下はまた、「感情移入の限界」についても指摘している。すなわち、「教室のなかで演出された差別体験

は、社会生活の様々な場面で実際に経験される人種差別とは異なっている。黒人やアメリカ先住民が受けてきた差別の実状を理解するには、疑似的な役割演技を通じて他者に感情移入するだけでは不十分で、被差別者の社会的立場や差別の歴史的背景も知らなければならない。その際、被差別者の『声』を聴くという体験は重要な位置を占めるだろう」(木下:214)という。

以上、木下が述べるように、第一に、エリオットの実験授業の成功は「差別のリアリティ」に支えられているが、同時にそれを追求することの難しさ、第二に、「感情移入の限界」という両課題は、「人種差別」をテーマとした体験型の教育実践の方法を探るにあたり、貴重な示唆を与えている。

### 2. 3 エンパシー、あるいは、知的作業をともなう感情移入

エリオットの実験授業のように差別のリアリティを追求することは、児童や教師にジレンマをもたらすのみならず、今日の学校では困難な教育実践と言わざるを得ない。また、教室の中の「差別体験」は、それがどんなに工夫された「リアル」なものであっても、その「虚構性」はぬぐえない。それゆえ、本研究は、「リアル／虚構」という二項対立の視点からではなく、むしろ虚構性もたらすリアルな力を積極的に探る立場に立っている<sup>3)</sup>。また、感情移入の限界については木下が指摘する通りである。差別の現実を理解するには、「疑似的な役割演技を通じて他者に感情移入するだけでは不十分」であり、授業に「当事者の声」を取り入れることは重要だ。ただし、本研究では「感情移入」については、「シンパシー (sympathy) /エンパシー (empathy)」の区別に関するブレイディみかこの議論を参考に整理し、本研究の授業指導案立案に役立てたい。

ブレイディ (2021) の整理によれば、シンパシー (sympathy) /エンパシー (empathy) のどちらの用語も日本語では「共感」と訳されることが多い。だが、エンパシーには、人が身につけるもの、すなわち「能力」が含意されており、それに対してシンパシーには、感情、行為、友情、理解等、内側から湧いてくるもの、といった違いがある。つまり、「シンパシーはかわいそうだと思う相手や共鳴する相手に対する心の動きや理解やそれに基づく行動であり、エンパシーは別にかわいそうだとも思わない相手や必ずしも同じ意見や考えを持っていない相手に対して、その人の立場だったら自分はどうだろうと想像してみる知的作業と言える」(ブレイディ:15)と述べている。両者には重なる部分もあるが、「知的作業」に媒介されているか否かを一つの基準として、両者の間に区別を設けている<sup>4)</sup>。

このようにエンパシーを、「知的作業をともなう感情移入」として捉え直すならば、「差別される立場」のみならず「差別する立場」の心情理解や行為理解も学習機会において必要ではないだろうか。エリオットの実験授業では、「差別される立場」への共感(同情や憐憫)を促す感情移入体験(=シンパシーの活用)が第一に焦点化されていた。その一方で、「差別する立場」については、こう言ってよければ、学校内の疑似的な「人種差別ゲーム」に必要な「悪役」として、「脇役」としてのみ位置づけられている。だが、エリオットの実験授業が本来内包していた「視点の逆転(役割交換)」というアイデアを積極的に活かそうとするならば、知的作業をともなう感情移入体験、すなわち「エンパシー」も活用し、「差別される立場」のみならず「差別する立場」の心情理解や行為理解も児童に促すことができるのではないだろうか。むろんここで、なぜ「差別する立場」の理解が必要なのか、という問いがあるだろう。その点については、今日、人権教育の進展もあり、「差別することは悪いこと」、「差別されている人はかわいそうだ」、といった認識や理解は深まってきている、と筆者はみている。だが問題は、そのような自覚をもった個人が、そうとは気づかぬまま差別の「加害者」になっている場合もあり得、差別を「自分ごととして考える」ことが必要だと考えているからだ。そのような現状認識に基づき、差別が関係的な現象であり、個人の信念とは別に、個人の心情や行為が歴史や社会的背景と密接に関係していることも同時に学ぶ必要があるだろう。

さらに、エリオットの実験授業においては、暗黙の裡に、「人種差別」が潜在するアメリカ社会の風土で児童たちも生きていることが前提されている。そのため、人種差別や黒人差別についての知識や情報は「自明のこと」、「常識」として、彼女の実験授業においては不問に付されていた。こうしたアメリカ的文脈と日本的文脈との違いも踏まえ、また、前述の木下の指摘にあった感情移入の限界を埋めるためにも、それらの知識や情報、当事者の声を、授業を通じて児童に伝える必要がある。

## 3. 授業指導案と教育支援・授業実践の概要

## 3. 1 授業指導案の概要

以上の検討を踏まえ、授業指導案を作成した。まず教材として、「道徳」の授業で使用されている「マーチン少年の夢—キング牧師」(所収『道徳図書館—小学校高学年編』文溪堂, 2019年)を用いることにした。キング牧師の少年時代の差別体験を語るこの物語は、おもに2つのエピソードで構成される。一つ目は、小学校入学以後、白人の双子の幼友達の母親に言われて遊べなくなった話。二つ目は、父親と靴屋に行ったとき、黒人専用の椅子に座るよう白人の店員に促され、父親にしたがってその店を出たエピソードである。どちらの逸話にも黒人(マーチン, 父親, 母親)と白人(双子の幼友達, その母親, 店員)が登場する(資料図1, 図2)。

そして、この物語を出発点に、エンパシーの活用・育成を考慮した授業指導案を組み立てた。この教材自体は、差別状況におけるマーチン少年の心情理解を基点に、他者に対する差別や不公平、偏見をもたずに接する態度を児童に促すことを目的としている。しかし、本研究の目的に照らすと、それでは、物語の主人公の心情理解(被差別者への感情移入や共感)、すなわち、シンパシーの活用にとどまっている。前述したように本研究では、人種差別について児童に考察を促す際、「差別される立場」の人への「シンパシー sympathy (同情・共感)」の観点からだけでなく、「エンパシー empathy (知的作業をともなう感情移入)」の観点からも考えることを促すようにした。そのため、たとえば、「差別する立場」の人の社会的・心理的理由も知的に想像させることで、人が人を差別する契機が、実は自分の中にも存在することに児童が気づけるよう導こうとした。そのようなエンパシーの活用へと児童を導くために、授業指導案の創案にあたって次のような留意点を設けた。

- (1) 知識・情報提供(当時の社会的背景や歴史等)を適宜行うこと。
- (2) 主人公の心情理解に終わらず、周囲の人物の心情や行為理解を促し、差別される立場と差別する立場の「視点の逆転」を疑似的な役割交換を通じて試みること。
- (3) 当事者の声に触れさせること。

以上の点に留意して、4コマ構成で作成した。以下の表は、本単元の指導計画の概略である。

	学習内容	本時の課題
第1時 (導入)	マーチン少年の物語から考える	・人種差別とは何か? ・マーチン少年の気持ちは?
第2時 (展開1)	マーチン少年以外の立場から考える	・マーチン少年以外の登場人物(白人)の気持ちや差別した理由は?
第3時 (展開2)	人種差別が起きた場面から考える	・人種差別を乗り越える公正、公平な態度とは?
第4時 (まとめ)	現在の人種差別, 身近な差別から考える	・私たちの社会や身近にある差別とは? ・当事者の声に触れて考えたことは?

## 3. 2 教育支援・授業実践の概要

なお、本教育支援・授業実践は、八王子市立松枝小学校の6年1組(28人)と2組(27人)を対象に実施した。授業者(T1)は同校6年1組担任の傳刀涼子教諭, 教育支援者(教育ボランティア)として筆者(T2)の他、学生有志(東京学芸大学・出口雅敏研究室)が参加した。授業実践は「道徳科」の時間に各クラスで週1コマ、計8回(2023年2月15日, 2月22日, 3月3日, 3月8日)実施した。各回の授業指導案, ワークシート(WS), PPT資料等は筆者が原案を作成し、事前に傳刀教諭と協議のうえ、適宜修正を加えた。また、第3時に使用するイラストと白黒スカーフ、そして視聴動画の準備等は、筆者を含む教育支援者で用意した。

単元名は傳刀教諭の提案により、「差別について自分ごととして考える」とし、単元学習を通じて「誰に対しても差別することや偏見をもつことなく、公正、公平な態度で接することができる」、「人種差別問題に対して、当事者意識をもって解決の為に何が出来るか考えることができる」ことを目標とした。

なお、本単元は道徳の内容項目における「公正・公平・社会正義」に関するものである。また、単元設定の理由については、以下である。すなわち、小学校高学年の児童は、差別や偏見がはじめの問題につながることを理解できるようになる。一方でそうした問題に対し、傍観者的な立場からではなく、自分自身の問題であるという当事者意識をもって身近な差別や偏見に向き合い、公正、公平な態度で行動することが求められている。人種差別の問題は、日本の児童にとって身近な問題とは感じないかもしれない。だが、グローバル化が進み、多様な価値と背景をもつ人々が生活している今日の社会において、改めて考えるべき意義の高いトピックといえる。そのような観点から、本授業実践では、私たちの世界に内在する差別について、自分の心の中にも潜むかもしれない差別や偏見の芽に目を向け、主体的かつ構造的に差別を理解するよう児童に促し、公正、公平にふるまう態度を養うことをねらいとした。

#### 4. 各授業の内容と様子

本章では各授業の内容について、授業指導案を具体的に示しながら報告する。また、各授業の様子や児童の反応など気づいた点についても言及していく。

##### 4. 1 第1時

第1時のねらい：『マーチン少年の夢－キング牧師』を読み、人種差別とはどのようなものか知るとともに、「差別される立場」の人の気持ちを考えることができる。

	学習内容, 学習活動 ( →: 問 ・ ➡: 生徒の反応)	教師の活動, 留意点	評価 (観点, 規準, 方法)
導入 5分	○BLMデモの動画からわかること →「何が映っているか」「どんな人が映っているか」「なぜこの人たちはデモ行進や集まったりしているのか」 ➡「人がいっぱいいる」「怒っている」「叫んでいる」「何か訴えている」「ジョージ・フロイドさん、って誰?」「 <u>黒人の命は大切</u> 、って言っている」… ○BLMデモの概要を確認	・人種差別に反対するデモや集会の動画 (T2) ・ワークシート (以下, WS) 配布 ・動画からわかることや人々の主張や気持ちを考えさせるように発問をする ・BLM運動の発端に触れる (PPTスライド) (T2)	・実際のデモの様子から人々が何を訴えているのか、どのような気持ちでいるのかを考えることができたか
展開① 10分	○「差別」という言葉に対する印象の共有 →「差別について聞いたことがあること」「差別に対してのイメージ」「具体的には?」 ➡「初めて聞いた」「差がある」「悪いこと」…	・グループ→全体 ・机間巡視しながら生徒の反応を見る	・差別という言葉に対する共有ができたか (発言・挙手)
展開② 20分	○一般的な差別の認識を確認する →「差別の意味を辞書で調べてみよう」(WS) ○『マーチン少年の夢－キング牧師』 →「読んでみて気がついたこと・わかったこと」 →問1: 友達のお母さんに「うちの子とは、もう遊んではいけないよ」と言われた時、どんな気持ちだったでしょう (WS)	・辞書から意味を確認する ・読み物を配布し授業者が読む ・突然友達と遊ぶことを拒否された時の悲しみや怒りの気持ちについて考えさせる	・マーチン少年の経験から差別というものが具体的にどのような経験であるか知ることができたか

	<p>➡「どうしていけないの」「遊びたいよ」「もう会えないの」「ひどい」</p> <p>→問2：お父さんに連れられて店を出た時、マーチンはどんなことを考えたでしょう (WS)</p> <p>➡「お父さん、かっこいいな」「決してほかたちが悪いわけではないのだ」「差別を許さないと、きっぱりと言おう」「みんな平等に仲良くするべきだ」</p> <p>→問3：マーチンはどんな思いで、人種差別をなくす働きを続けたのでしょうか (WS)</p> <p>➡「子供のころの悔しさが忘れられない」「差別は絶対にあってはいけない」「黒人も白人も平等であるべきだ」「あきらめてはいけない」「よりよい世の中を作るのだ」</p>	<p>・父親の姿に感銘を受けたマーチンに「共感」することを通して、差別や偏見に対して、どう向き合えば良いかを考えさせる</p> <p>・マーチンに「共感」することを通して、差別や偏見のない世の中を実現するために大切な想いについて考えさせる</p>	<p>・マーチン少年に「共感」することで差別がいけないことだと考えることができたか</p> <p>・マーチン少年（のちのキング牧師、1929年生まれ、1964年ノーベル平和賞、1968年に暗殺される）が少年時代の経験から、世の中から差別をなくすために働き続けたことを知ることができたか</p>
<p>まとめ 10分</p>	<p>○「動画の人たちは何を訴えているのか」</p> <p>○「なぜそれはいけないことなのか」</p> <p>➡「人格をみとめていない」「皆、同じ人間なのだから、見た目で差別してほしくない」</p>	<p>・個人→全体共有</p> <p>・机間巡視しながら生徒の反応を確認しておく</p>	<p>・本時の内容を踏まえて人種差別について理解し、差別や偏見が社会の中で問題だと確認できたか</p>

\*資料の準備：「マーチン少年の夢—キング牧師」（所収『道徳図書館—小学校高学年編』文溪堂，2019年）カラーコピー，WS，BLMデモ動画（You tube）「アメリカと人種#1」（※視聴箇所：冒頭～2：06，～2：21），BLMの概要説明（PPTスライド）

第1時の授業では、BLM運動（2020年5月以降）を導入としてアメリカ社会の人種差別問題を取り上げ、なかでも黒人差別と向き合ったキング牧師の少年時代の差別経験とその後の生き方を通して、人種問題に触れる機会とした。はじめに、BLMデモ・集会の動画を視聴した後、授業者（T2）が、用語BLM（Black Lives Matter，黒人の命は大切）の説明、運動の発端となったG.フロイドさん事件、人種差別・黒人差別に反対する運動がアメリカ国内から日本を含む世界各地に広がったことをPPTで説明した。そして、国語辞書も使いながら「差別」という言葉の意味やイメージをクラス全員で共有した。

次に、「人種差別」とは具体的にどのような経験なのか、『マーチン少年の夢—キング牧師』を読み、主人公マーチン少年の心情を想像させることで、「差別される立場」の人の気持ちを理解するよう促した。

児童たちは、差別や偏見が良くないこと、「差別される立場」の人の気持ちに立ち、共感することはよく出来た。一方、「人種差別」の理解の仕方には特徴がみられた。今日、人種差別はどのような場面で起きるかという発問に対し、「男女差別」や「ジェンダー・バイアス」，「障がい者差別」を例に挙げる児童が多かった。前者の例として、たとえば、「女はスカート，男はズボン」，「男なら泣くな，女ならちゃんとしろ」が挙げられ、なかには、「男（女）同士で，付き合ってるの～」とセクシャリティ差別を指摘する児童もいた。日本にも人種差別はあるという意見もあったが、日本には人種差別はない，あまりない，少ないという意見も多くみられた。

#### 4. 2 第2時

第2時のねらい：『マーチン少年の夢—キング牧師』の主人公マーチン少年以外の登場人物（白人）について考え、「差別する立場」の人の気持ちや理由を考えることを通して、立場が変わると見方が変わることに気づくことができる。

	学習内容, 学習活動 ( →: 問 ・ ➡: 生徒の反応)	教師の活動, 留意点	評価 (観点, 規準, 方法)
導入 5分	○前回のまとめ →マーチン少年の気持ちはどうだったでしょうか? ➡「差別されて悲しい」「嫌な気分」「差別をなくそう」 ○自分の中の黒人イメージについて考える→「黒人」の人に対してあなたはどのように思いますか?(WS) ➡「差別されてかわいそう」「強そう」「明るい」「こわい」「スポーツが得意」「音楽のセンスがある」	・「差別される立場」の気持ちを確認する ・WS配布  ・自分の中の黒人イメージを確認させる	・「差別される立場」の気持ちを理解できているか  ・自分の中の黒人イメージを意識できたか
展開① 10分	○アメリカ黒人の歴史について知る →「アメリカ黒人の歴史」を知ってどう思いましたか?(WS) ➡「奴隷だったとは知らなかった」「いろいろ苦勞した」「差別される理由がわかった」「キング牧師は偉い」「黒人がかわいそう」「白人はひどい」	・アメリカ黒人の歴史を振り返る(PPTスライド)(T2) ①奴隷時代, 奴隷船, 綿花 ②南北戦争, 奴隷解放宣言 ③人種隔離政策(ジム・クロウ法) ④バス・ボイコット, 公民権法, キング牧師	・アメリカの黒人の歴史から, 彼らが差別されてきた理由を理解できたか  ・マーチン少年が過ごした時代の社会的背景を理解できたか
展開② 20分	○『マーチン少年の夢-キング牧師』を再読する →「差別する立場」の気持ちや理由は?(WS) →問1: お母さんに「マーチンとは, もう遊んではいけないよ」と言われた時, ふたごの男の子たちはどんな気持ちだったでしょう。(WS) ➡「仲よしなのになんで?」「白人と黒人は違うんだ」「そんな決まりはおかしい」「仕方ない」 →問2: マーチン親子が「この店ではくつを買わないことにする」と言って店を出た時, 白人の店員はどんなことを考えたでしょう。(WS) ➡「黒人のくせに偉そう」「生意気」「二度と店に来るな」「ルールだから仕方ない」「他の店も同じなのに」  →問3: ふたごの男の子たちのお母さんや白人の店員は, <u>どのような理由から人種差別をしたのでしょうか。</u> (WS) ➡「それが社会の決まりだから」「黒人はもともと奴隷だから」「みんなそうしているから」	・読み物を配布 ・児童が一人ひとり読む ・「白人=差別する悪い人」と理解させないように注意 ・ <u>差別されて嫌な思いをする人の気持ちに寄り添わず, 「社会の決まり」, 「常識」や「当たり前」に安易に従うことに問題がある,</u> と児童の理解を促す ・ふたごの男の子たちの母親は「うちの子は白人だけど, あなたは黒人なのよ。 <u>だから, いっしょに遊んではいけないし, 小学校へ行く年になると, 別々の学校へ行かなくてはならないよ</u> 」(社会の決まり) ・白人の店員は「 <u>ここの</u> <u>いすは, 白人専用なので</u> 」(社会の決まり) ・(間違った)「社会の決まり」, 「常識」や「当た	・「差別する立場」の気持ちや理由を考えることができたか
展開③ 5分	○人種差別はどうして起きるのか考える →グループで話し合う・発表してもらう・感想を聞く(WS)	・(間違った)「社会の決まり」, 「常識」や「当た	・他のグループの発表を聞くことができ

	➡「自分と違う人間はこわいから」「差別されている人の気持ちがわからないから」	り前」を変えることはできないのか？	たか
まとめ 5分	○マーチン少年（キング牧師）の夢とは？→「I Have a Dream（私には夢がある）」「私には夢がある。それは、いつの日か私の幼い子どもたちが、肌の色ではなく、人格そのものによって評価される国に住むという夢である」	・授業者（T2）が「I Have a Dream（私には夢がある）」を読む・差別をなくせるように、みんなが公正・公平にふるまうよう心がけることが大事だと伝える	・本時を踏まえて自分なりに人種差別について考えることができたか

\*資料の準備：『マーチン少年の夢—キング牧師』カラーコピー，WS，アメリカ黒人の歴史・キング牧師・キング牧師少年時代当時のアメリカ社会について（PPTスライド）

第2時の授業では、自分の中の黒人イメージの確認から始めた。その後、なぜアメリカに黒人がいるのか、アメリカ黒人の歴史を簡潔に振り返った。PPTスライドを使って、①奴隷時代、②奴隷解放宣言、③人種隔離政策（マーチン少年の生きた時代）、④公民権法（キング牧師の闘い）、と4つの時期・トピックに分け、アメリカ黒人が置かれてきた社会的背景や差別の歴史について筆者（授業者T2）が概説した。特に、③の時期・トピックについては『マーチン少年の夢—キング牧師』の時代背景であることを強調して伝えた。

そのうえで『マーチン少年の夢—キング牧師』を再読し、物語に登場する主人公マーチン少年以外の登場人物たち（白人）の立場に立って、差別や偏見を考えることを児童に促した。つまり、「差別する立場」の人の気持ちや差別が生まれる社会的・心理的理由について、アメリカ黒人の歴史やマーチン少年が生きた時代の社会的背景から考えるように児童を導いた。

児童の黒人イメージは、「強そう」、「体が大きい」、「少しこわい」という意見もあったが、「イメージがわからない」、「同じ人間、肌が黒いだけ」、「何とも思わない」という意見が多数を占めた。アメリカ黒人の歴史については、「ひどい話」、「耐えてきたのはすごい」、「同じ人間なのに、教室を分けるのはおかしい」、という感想であった。「差別する立場」の人の心情理解や行為理解については、差別する理由としては、「肌の色が違うから」、「奴隷だったから」、「差別したくないけれど、そうするしかなかったから」、「国の法律に従わないと捕まるから」、「悲しいけれど、ルールだから」、「昔からの教えだから」、「周りがそうしているから」、「そうしないと、仲間外れにされるから」、「親がそう言っていたから」等の理由を挙げた。これらの回答で興味深い点は、「差別する立場」にあった白人たち自身も葛藤している、と想像する児童も多くみられた点だ。また、人種差別はなくなるという意見もあったが、容易にはなくなるという意見の方が多かった。

#### 4. 3 第3時

第3時のねらい：実際に差別が起きた場面から、「差別される立場」と「差別する立場」の人の気持ちを考えることができる。

	学習内容, 学習活動 ( → : 問 ・ ➡ : 生徒の反応 )	教師の活動, 留意点	評価 ( 観点, 規準, 方法 )
導入 5分	○前回のまとめの共有 →「なぜ差別するのか」 ➡「肌の色が違うから」「自分と違うから」「決まりだから」「社会が悪かったから」 ○キング牧師の「I Have a Dream」を振り返る	・肌の色の違いとその人の能力や人格は関係がないこと ・社会の不公正, 不公平な決まり（ルール）を見直すこと ・「I Have a Dream」動画（T2）	・誰かを差別する理由を内省し, 理解しようとしているか ・キング牧師の夢を理解できているか

<p>展開① 20分</p>	<p>【昔の時代】 ●黒人役／白人役のセリフの創作 (WS1) 場面1: バスの中で 場面2: 公園で 場面3: バレエ・リハーサル室で →「昔なら…」セリフは?  ○黒人役／白人役の役割交代 ○グループ発表  →「黒人役」「白人役」についての感想は? (WS3) ➡「差別されるのは嫌だ」「差別したくない」 「社会の決まりに従っただけ」 →役割交代してどう思ったか? (WS3) ➡「不公平に感じた」「差別するのも、されるのも嫌だ」「差別する側はあまり考えていない」  【今の時代】 ●黒人役／白人役のセリフの創作 (WS2)</p>	<p>・グループを作る ・場面1, 場面2, 場面3の説明 (PPTスライド) (T2) ・グループごとに場面を選択 ・WS1, WS2, WS3配布 ・黒／白スカーフを配布 ・セリフの創作→ロールプレイ ・黒／白スカーフの交代 ・ロールプレイ</p>	<p>・活動の内容を理解し、皆と協働して活動(セリフの創作・ロールプレイ)に取り組んでいるか  ・これまで学習してきたことを活かして、【昔の時代】の「黒人役」「白人役」のそれぞれのセリフを創作できているか ・公正・公平な視点から、【今の時代】の「黒人役」「白人役」のそれぞれのセリフを創作できているか ・差別の問題を「社会」の問題であると同時に、「個人」のふるまいの問題とし、自分ごととして理解できているか</p>
<p>展開② 15分</p>	<p>場面1, 場面2, 場面3 →「今なら…」セリフは? ○グループ発表 →考える時に気をつけたことは? (WS3) ➡「差別しない」「肌の色に関係なく接する」 「違いを認める」「フレンドリーにふるまう」</p>	<p>・セリフの創作 ・ロールプレイ ・観ていた他のグループの児童にも感想を聞く</p>	
<p>まとめ 5分</p>	<p>場面4: BLMのデモで →どんなことを話しているかな? (全体) (WS3) ➡「差別は良くない」「仲良くしようね」→個人でセリフをつくる, 発表</p>	<p>・場面4説明 (PPTスライド) (T2) ・セリフのアイデアや意見は, 全体→個人</p>	<p>・差別が起きる場面に立ち, どうすればよいか主体的に考えることができたか</p>

\*資料の準備: WS1 (昔の時代用), WS2 (今の時代用), WS3, 黒・白スカーフを各15枚, イラスト場面1・2・3・4 (PPTスライド), キング牧師「I Have a Dream」動画 (You tube)

第3時の授業では、肌の色の違いとその人の能力や人格は関係がないこと、社会の不公正、不公平な決まり(ルールや常識)は見直せること、の2点をまず確認し、キング牧師(マーチン少年)の反人種差別演説「I Have a Dream」の動画を視聴した。

続いて、過去に実際に人種差別が起きた場面をイラスト化したワークシートを用いて、イラスト・ランゲージを行った(資料図3, 4, 5)。黒人・白人役それぞれ黒・白スカーフを着用し、イラスト場面の会話を再現・創作するグループ活動である(途中、役割交換)。最後に、BLMデモに参加している黒人・白人の子どものイラストを見せ、会話の中身を考えるよう児童に促した(資料図6)。

セリフ創作は、過去の事件として紹介したイラスト場面については円滑に活動が進んだ。だが、それ以外の場面では創作に手間取っていた。時間的制約から、役割交換が行えないグループもあった。黒人役の感想は、「かなしい」、「つらい」、「同じ人間なのに、おかしい」等が大半で、白人役では、「難しい」、「心が痛い」、「申し訳ない」、「差別する意味が分からない」、「気分がいい」、「いじめるの楽しい」、「本当に嫌いな人と、別に嫌



	なら, どう接しますか? (WS)	どもに対する意識を深める	
まとめ 5分	○金美玲さんへの手紙 (WS) ○「差別について自分ごととして考える」授業について感想 (WS)		・差別や偏見について意識的に考えるようになったか

\*資料の準備:「反ヘイトスピーチ集会」(2016年, 川崎市)の動画 (You tube), WS

第4時の授業では, ここまで学習してきた人種差別問題が「対岸の火事」ではないと伝え, 日本社会の身近な例として, 在日コリアンの反ヘイトスピーチ集会 (2016年, 川崎市)の動画を視聴した<sup>5)</sup>。視聴後, ヘイトスピーチ, 在日コリアンについて説明をした<sup>6)</sup>。

次に, 「当事者の声」として在日コリアン4世の学生 (スウェーデン留学中)とオンライン対話を行なった。そして最後に, 本授業実践の4回分を振り返り, まとめをした。

差別や偏見のない世の中にするために必要な態度や自分にできることは何か, という発問に対して, 「相手によって態度を変えない」, 「どんな人にも同じように接する」, 「まず自分が差別や偏見をもたない」, 「相手の気持ちを考えて発言する」, 「外見だけでなく内面を見る」, 「相手の事をよく知ろうとする」という意見が多かった。また, 外国から転校生が来ました, あなたならどう接しますか?についても, 「優しく話しかける」, 「困っていたら助けてあげる」, 「友達になる」, 「みんなで遊ぶ」, 「相手の国についていろいろ聞く」, 等が挙がった。

「在日コリアン」については, ほぼ全児童が知らなかった。オンラインで対話した在日コリアン学生に対する感謝の手紙には, 知らないことを教えてくれたことや, 在日コリアンであることに誇りをもっている姿に尊敬の念を覚えたという感想の他に, 印象的だったのは, 時差があるにもかかわらず, 彼女が深夜遅くまで自分たちのために起きて話をしてくれたことに対する感謝の言葉を送る児童が多くいた点だ。

4回の授業を通して, 改めて差別や偏見は良くないと再認識したこと, 現在の差別に昔の事が関係していることに驚いたこと, 外国人の転校生や外国にルーツをもつ友だち, 障がいのある人に対しても公平に接し, 自分の周囲から差別をなくすことを心がける, と回答する児童がほとんどであった。

## 5. 教育支援の成果と課題

以上, 本研究は, 多文化共生教育支援の一環として, 小学生高学年を対象に人種差別をテーマとする体験型の教育実践の方法を探ることを目的に, J.エリオットの実験授業を批判的に検討しながら授業指導案を考案し, 授業実践の報告を行った。

最後に, その成果と課題を以下に整理したい。

本稿では, 体験型の教育実践の方法として, 「感情移入」と「視点の逆転 (役割交換)」に着目した。その際, 感情移入の過程に注意し, シンパシーの活用とエンパシーの活用を区別した。そして, 後者のエンパシーを「知的作業をともなう感情移入」と捉え, その学習機会を, 視点の逆転 (=差別される立場/差別する立場の役割交換)の場面で, 歴史や社会的背景等の知識・情報を伝えることで, 自身の立場とは異なる「他者」の心情・行為理解を促し, 主体的かつ構造的に人種差別現象を理解する契機を児童に促した。同時にまた, 疑似的なロールプレイ (役割演技)の一定の有効性を前提としながら, 感情移入の限界もみとめ, 当事者の声を授業指導案に反映するようにした。実際の授業実践から, いくつかの成果と課題が示唆された。

第一に, 対象児童学年の設定にかかわる問題である。本研究で対象とした小学生高学年児童たちの「人種」認識はきわめて曖昧であり, 「人種差別」意識も薄いように思われた。これは肯定的にも評価できるが, それは教育の成果というよりも, 発達段階の問題か, 日本的な文脈に要因があるかもしれない。授業では, 人種差別の典型としてアメリカの黒人差別問題を扱った。だが, そもそも「黒人」がわからない, という児童もいた。それゆえ授業の導入場面から, ハードルは高かったかもしれない。それでも, 本授業実践は4時間構成であったため, 時間をかけて黒人差別問題を学ぶきっかけになったようだ。とはいえ, 児童には, 「黒人/白人」の住む社会イメージが不十分であり, その理解の定着のないままに授業が進行した恐れがある<sup>7)</sup>。さらに, 「黒

人／白人」という区別そのものがダメだ、という正義感も児童には観察された。そのため、ロールプレイの時間が上手く活用できなかった可能性もある。授業者 (T1) の傳刀教諭によれば、ロールプレイに実効性をもたせる改善策としては、それをグループ学習ではなく、全体学習で進める方が児童も安心感が得られるだろうとの意見であった<sup>8)</sup>。

第二に、しかしながら、第2時の報告にもあるように、「差別する立場」の論理や葛藤を知的に想像する児童がいたことは、エンパシーの活用の一定の成果だと考えられる。第2時の授業の様子からは、「差別する立場」の心情・行為理解に関して、社会の「決まり」や「ルール」、その他、「歴史」や差別行為に影響すると思われる周囲の要因に、児童の注意を向けさせることができた。さらに、児童は、「差別する立場」の内的な葛藤や矛盾の指摘、すなわち、社会のルールや習慣と自己の信念のあいだに生まれる悩みにも指摘が及んだ。児童がそのことを知的に想像できたのは、シンパシーの活用 (同情や憐憫) とは区別される。それは、エンパシーの活用 (知的作業をともなう感情移入) の発露と言え、人種差別現象を主体的かつ構造的にみる契機となり得る。

第三に、授業設計・授業計画に関する問題である。総じて、授業全体に時間的余裕がなかった。とくに第3時では、「視点の逆転 (役割交換)」をする時間が取れなかったグループもあった。第3時の授業指導案では、「昔の時代」と「今の時代」にワークシートを時代設定で分けてグループ活動を行い、それぞれセリフを創作し、比較させようと当初は意図していた。しかし、実際に1組で授業を行うと時間が足りず、役割交換できなかったグループが多かった。そのため、急遽、傳刀教諭と相談し、次の2組の授業では時代設定をせずに行った。これは授業設計・授業計画のミスだった<sup>9)</sup>。

また、第2時で授業者 (T2) の筆者が行った、「アメリカ黒人の歴史」の概要説明が講義調になっていた、と教育ボランティアの学生から指摘された。その改善には、アメリカ黒人の歴史や社会的背景についての説明の後、たとえば、調べ学習の時間を設けるなど工夫が必要である。

第四に、第4時の在日コリアン学生に対する反応から、普段、児童が社会生活の中で出会うことの少ない人たち、マイノリティ当事者たちの声や姿に直接に接する体験は、広く差別問題を考えるうえでも大きな教育効果をもたらすと改めて理解された。今回、児童たちにとって人生で初めて出会った在日コリアンの真摯な態度や優しさが、在日コリアンに対する今後の彼らの見方にも影響するはずだ。こうした児童たちの思わぬ反応や感受性の発見は、筆者自身の嬉しい驚きであった。

## 6. おわりに

本教育支援・授業実践を通じて、小学生高学年児童の黒人認識は薄く、授業を通じてどこまで児童の人種差別・黒人差別に対する理解や認識を深めることができたか、評価は難しい。だが、児童たちの「差別」についての意識は高かった。生活の中における差別問題の所在の理解度や人権意識は予想以上に高く感じられ、とくに第1時の報告でみたように、男女差別やジェンダー・バイアスへの関心は高かった<sup>10)</sup>。

今回、差別問題に関する新たな授業開発の可能性、とくに、マイクロ・アグレッションやアンコンシャス・バイアスについて、傳刀教諭より示唆も頂けた。教諭によれば、普段の授業でも教師の発言に対し、「先生、それ何気に〇〇デイスっているよね?」とか、クラスには不登校児童が3名いるが、不登校児童の空席に教師が他意なく私物を置くと、「先生、そこにモノを置くのは良くないよ」と児童から指摘を受ける経験があると伺った。そういうセンサーが児童にもある。授業指導案の開発や改善の貴重な道しるべとして今後を活かしたい。

## 謝辞

この度、授業実践にご協力いただいた、傳刀涼子教諭をはじめ、八王子市立松枝小学校の教職員の皆様、6年1組と2組の児童の皆様、イラスト作画にご協力いただいた庄司理瀬様、大変お世話になりました。感謝申し上げます。なお、本研究は日本生活学会・2021年度生活学プロジェクトの成果の一端です。

注

- 1) 中山京子らは、初等・中等教育において「人種」や「民族」をどう教えるかに関して、海外の事例や具体的な授業構想とともに多面的な検討をしている（中山ほか編2020）。その著書の副題にもあるように、「人種」、「民族」という創られた概念を解体した授業づくりが目指されている。そのような脱本質主義的な視点から、「人種差別」の問題をどう教えるか、本稿では筆者の力量不足のため検討できなかったが、今後の課題としたい。
- 2) 日本の小中高の教科書では日本国内の差別問題に限定され、人種差別や黒人差別に関する記述は少ない（川島2011）。
- 3) 以前、小学生高学年を対象に「来訪神の再現授業」を筆者が実施した際、再現された来訪神（沖縄県宮古島・パーントゥ）と児童が対面し、質疑応答をする場面を設けたことがあった（出口2022）。その際、児童はそれが一時的に再現された「虚構」であることをどこかで理解しながらも、複製された来訪神に対して「お祭りから帰った後、何をしているのか?」、「(来訪神が住む) 異世界の様子は?」、「裸足で痛くないのか?」、「その格好で船に乗れたのか?」等、熱心に質問する場面があった。筆者はこの時の参与観察から、「リアル／虚構」といった二項対立の自明性をエポケーシ、「虚構性」が児童の学習場面にもたらす力や効果を積極的に評価する視点を得る経験をした。
- 4) ブレイディが指摘するように、辞書では一般に、シンパシーには「共感」、エンパシーには「感情移入」、「共感」という日本語の訳語が付されている場合が多い。本稿も、日本語の感情移入と共感をほぼ同義のものとして捉え、そのうえで、必要に応じてブレディの指摘する両者の区別を活かそうとしている。
- 5) 傳刀教諭のお話では、ヘイトスピーチはもちろんのこと、反ヘイトスピーチ集会の動画も児童に見せることに抵抗がある同僚教員もいたという。残念ながら、その教員の方とお話しをする機会はなかったが、そのような反応も予想はできた。デリケートな問題でもあるため、授業を担当される教員の周囲でそのような反応を示す同僚教員の方との意見交換も大事である。今後の教育支援活動においては配慮したい。
- 6) ヘイトスピーチは、「ある特定の人種や民族の人たちに対して、差別したり侮辱したりする言葉やふるまい」。在日コリアンは、「かつて、日本が朝鮮を植民地としていた時代に、日本に連れてこられたり、さまざまな理由で、現在も日本で生活している人たち」。また、授業の最後には、多文化共生について「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と児童に説明をした。
- 7) 本稿では、共感や感情移入に区別を設けることでエンパシーの活用を目指した。だが、そもそも黒人の心情・行為理解にしても白人の心情・行為理解にしても、児童のみならず私たちからすれば、じつはどちらもエンパシーの活用（知的作業をとまなう感情移入）と言える側面もあるだろう。
- 8) なお傳刀教諭から、ロールプレイ（役割演技）は高学年よりむしろ、中学年の3・4年生の方が適しているのではないかとアドバイスも受けた。高学年の5・6年生になると恥ずかしがったり、正義感や倫理観から「差別する立場」に立てないのではないかと、との指摘であった。筆者としては、今後、小学生中学年向けと、また逆に、中学生以上の生徒を対象に、本授業指導案を改善したうえで実施し検討を重ねたいと考えている。
- 9) 第3時については他にも、グループ内で話し合いながらセリフ創作が出来ても、それをワークシートに文字化する過程に難しさが見られた、と教育ボランティアの学生から観察報告があった。セリフ創作の会話中に脱線し、ふざけてしまったり、創作したセリフを文字化する際に簡易化してしまったり、齟齬が観察されたという。セリフ創作は、本授業指導案の要点の一つでもあるので、この点も改善の必要性があるだろう。
- 10) この点について傳刀教諭のお話では、2月に学校行事の一つとして「ピンクシャツデー」が全学的に行われているため、そのような回答をする児童が多かったのではないかと推測をされていた。なお、日本ピンクシャツデー公式サイトによれば、ピンクシャツデーとはカナダの学生から始まった「いじめ反対運動」の日である。2007年2月、ピンクのシャツを着て登校した中学生の少年が「ホモセクシャルだ」といじめられた。その話を聞いた高校生二人が75枚のピンクシャツを購入し、インターネットで、「明日、一緒に学校でピンクのシャツを着よう!」と呼びかけ、いじめもなくなった実話から運動が始まった。現在、世界各地で2月最終水曜日をピンクシャツデーとし、いじめに反対する日とされている。

引用・参考文献

ウィリアム、ピータース（白石文人訳）『青い目 茶色い目：人種差別と闘った教育の記録』日本放送出版協会、1988年  
川島浩平「日本の小学校・中学校における『人種』・『黒人』観の形成と定着—学習指導の内容と知識の習得を中心に—」、武蔵大

学人文学会雑誌, 第42巻, 第3・4号, pp.127-154, 2011年

木下 慎「『青い目茶色い目』の実践から考える道徳の教育方法—松下良平の道徳教育論を導きとして—」東京電機大学総合文化研究, 第15号, pp.211-215, 2017年

出口雅敏「多文化共生教育の視点からみた小学校社会科教科書の課題」『多文化共生教育に関わる教科書研究』東京学芸大学人文社会科学系地域研究分野, pp.1-10, 2017年

——「小学生を対象とした来訪師の再現授業—『総合的な学習の時間』と『学童クラブ』での教育支援事例—」『東京学芸大学紀要.人文社会科学系.Ⅱ』第73集, pp.88-100, 2022年

中山京子ほか編著『「人種」「民族」をどう教えるか—創られた概念の解体をめざして』明石書店, 2020年

ブレイディみかこ『他者の靴を履く—アナーキック・エンパシーのすすめ』文藝春秋, 2021年

吉本恒幸監修/道徳図書館編集委員会企画・編「マーチン少年の夢—キング牧師」, 『道徳図書館—みんなといのちのちの章 小学校高学年編』文溪堂, 2019年

資料



図1 「マーチン少年の夢—キング牧師」

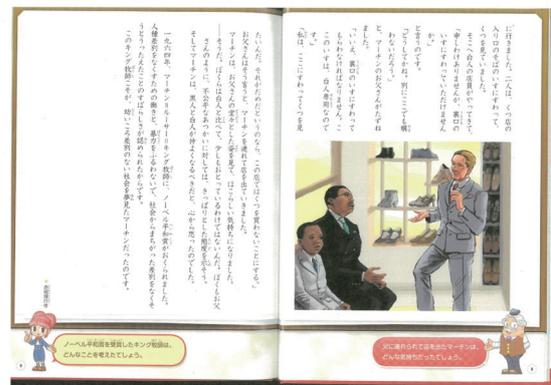


図2 「マーチン少年の夢—キング牧師」



図3 場面1：バスの中で (イラスト 庄司理瀬氏)



図4 場面2：公園で (イラスト 庄司理瀬氏)



図5 場面3：バレエ・リハーサル室で (イラスト 庄司理瀬氏)



図6 場面4：BLMのデモで (イラスト 庄司理瀬氏)

## A Lesson on Racism:

### A Case Study of Educational Support in the Upper Elementary School

DEGUCHI Masatoshi\*

#### *Area Studies*

(Received for Publication; August 30, 2023)

#### Abstract

The purpose of this paper is to explore methods of experiential and educational practice for the upper grades of elementary school on the topic of racism. In addition, this research is positioned as part of multicultural education support. Therefore, we would like to contribute to the development of multicultural education by actually creating lesson plans on the theme of racism and clarifying the possibilities and issues through educational practice together with school teachers.

In this paper, we will critically examine J. Elliot's experimental class "Blue Eyes/Brown Eyes" as a pioneering example of an experience-based learning on the theme of racism. In Elliot's experimental class, the incorporation of "sympathy/empathy" and "perspective reversal (role exchange)" is highly evaluated. However, rather than pursuing the depth of sympathy or the reality of discrimination, this paper proposes a lesson plan that aims to cultivate "empathy through intellectual work".

**Keywords:** racism, sympathy/empathy, perspective reversal, experience-based learning, multicultural education, educational support

---

\* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)